

【新潟税務署長賞】

『あたりまえ』を支える税金」

新潟県立

新潟高等学校

二年 揖斐 さくら

「高校は公立にしてほしいな。」

私が志望高校を決める際に母が私に言った言葉だ。たまたま私は公立高校を志望していたのでそのまま公立高校へ進学した。つまり私は何のためらいもなく公立高校へ進学した。これでは何が言いたいのかわからないと思うので、私のとある経験を話したい。

私は一年間チリという南米に位置する国に留学していた。チリではホームステイをさせてもらっていたということもあり、ホストファミリーとよく日本とチリの違いなどを話していた。そこである日のテーマになったのが学校についてである。私は現地の私立学校に通わせてもらっていた。公立高校という選択肢がなかったのも、チリに公立高校はあるのか聞いてみた。するとホストマザーは私にこう説明してくれた。

「公立高校もあるけれど、治安が良くないの。窓は割れてたり、生徒が先生をいじめたりするのよ。だから親は高いお金を払ってでも私立高校へ通わせるの。」

私はこのことにとっても違和感を感じた。なぜなら、日本では、少なくとも私の地域では公立高校と私立高校の教育の質に大差はないと思っていたからである。公立高校だからといって勉強する環境が整っていないということはまずないだろう。つまり、チリでは最初に述べた「ためらいなく公立高校へ進学する」ということ

はできないだろう。そこで、日本ではなぜ「ためらいなく公立高校へ進学できる」のだろうと考えると、税金が陰で支えているからだということに気付いた。そこでどれほど私たちの教育費が税によって賄われているのか調べてみると、高校三年間では、一人あたり三百万円以上も負担されているということが分かった。とても膨大な費用を私たちは支援してもらっている。一方で、もし税金がなかったら公立高校はどうなるのだろうか。一方、もし校舎の設備は？先生の数は？だれもが高等教育を受けられる環境は整うのだろうか。

このように考えてみると、税金は私たちに最も身近な環境である教育の場を提供してくれている。「ためらいなく公立高校へ進学する」という選択ができるのはとても恵まれていることなのだと感じている。昨今減税についての議論が交わされている。私たちの教育の場を守りつつも国民が納得できる税のあり方を議論していく必要があるだろう。